

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 異文化理解を考える－日本文系卒業論文指導にまつわる一視点－

doi:10.29714/TKJJ.200003.0004

淡江日本論叢, (9), 2000

作者/Author：河村裕之

頁數/Page：74-90

出版日期/Publication Date：2000/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200003.0004>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



airiti

異文化理解を考える —日本文系卒業論文指導にまつわる一視点—

淡江大學專任講師
河村裕之

要旨

本稿は、自己の生活世界とは異なる社会、異文化をめぐる諸事情についての研究作業という営為のプロセスにおける「理解」ということに関する自明性について問い直してみようとするものである。さまざまな他者、ある事象について知ること、それらを探求することにおける一つの自省である。

とりわけここで問題としたいのは、対象を捉えようとするときに、その対象についての理解にすでに色がつき過ぎているのではないかということ、また理解しようとするその回路自体が一定の枠に捉われていることで、結局見るべきものが見えなくなってしまう可能性があるのではないかということである。正確な対象把握、さらなる理解のためには、知ったつもりでいることやわかったつもりになることが落とし穴になるかもしれない。時には立ち止まり、自分自身の対象把握の立脚点や思考経験について自省してみることが重要であろうと考える。

キー・ワード：異文化、他者、理解、自明性

airiti

異文化理解を考える — 日 文 系 卒 業 論 文 指 導 に ま つ わ る 一 視 点 —

淡江大學専任講師

河村裕之

0. はじめに

本稿は、自己の生活世界とは異なる社会、異文化をめぐる諸事情についての研究作業という営為のプロセスにおける「理解」ということに関する自明性について問い直してみようとするものである。さまざまな他者、ある事象について知ること、それらを探求することにおける一つの自省でもある。

とりわけここで問題としたいのは、対象を捉えようとする際に、その対象についての理解にすでに色がつき過ぎているのではないかということ、また理解しようとするその回路自体が一定の枠に捉われていることで、結局見るべきものが見えなくなってしまう可能性があるのではないかということである。正確な対象把握、さらなる理解のためには、知ったつもりでいることやわかったつもりになることが落とし穴になるかもしれない。ときには立ち止まり、自分自身の対象把握の立脚点や思考経験について自省してみることが重要なことであろうと考える。

そしてそのことを、外国語である日本語を学び、「日本」を対象とした知的作業を積み重ねてきた一つの成果として卒業論文の作成に取り組む学生たちに促していくことは意味のあることであろうと考える。他者理解という営為がより豊かに積み重ねられていくために。

ここでの論の進めかたを、筆者自身の異文化考察経験の記述を交えながら、本校日文学生の「日本」を対象とした卒業論文指導上感じられる「理解」ということにまつわる問題点について考えるというふうにしたい。何らかの対象に関して知ること、他者理解ということであれば、それは何も異文化や自身の生活圏以外のことやものに限定して考える必要はないのだが、外来者としての筆者の異文化考察経験を引き合いに出すのは、「日本」について捉えようとする台湾の学生たちの思考経験を、それと対照しつつ考えようということからである。

1. 理解の「定型回路」への疑問

われわれは関心の対象となるものについて、さまざまな情報収集を行おうとする。いろいろな文献や各種の資料に当たったり、また調査地で見たり聞いたりするという作業を重ねる。そして、そうして得られた知識やデータ、体験をもとにして、理解、解釈しえたとするものを記述作業により表現し、誰かに伝達しようとする。

例えば、筆者が学んできた文化人類学における民族誌についていえば、それはある関心対象地でのフィールドワークで得られた経験やデータを基にして、さまざまな分析や解釈を通して、その社会、そこで暮らす人々について何ごとかの記述をなすということになる。そしてそこでは、フィールドにいるときも、戻ってきてからも、他者を理解、解釈することが軸になるわけだが、調査、研究に携わるひとびとによって、そのフィールドで獲得しえたことをなにか分析するということの、その枠組みの妥当性や客観性などについてもさまざまに議論がなされてきた。

ところが、サイード^{註1)}は『オリエンタリズム』において、歴史的に政治的に制度化されてきた学問研究全般のもっている、西洋的近代の知による「理解」の回路そのものに痛烈な疑問を投げかけ、異文化を対象とする研究に根本的な見直しを迫ったのである。それは従来の文化相対主義の議論の枠を大きく超えたものであり、そこでは、フィールドワークの成果を書き記して「こちら」側で誰か（読者）に伝えるという自明性さえもが検討の対象となってくる。

松田素二は次のように論考している。民族誌記述の構造は、フィールドで得たことをもとに記述し、読者の理解を得たのではなく、読者の理解そのものが実は歴史的に政治的に形成されていた（人類学者の属する社会によって理解される回路自体がすでにでき上がっていた）のであり、記述はその巨大な「定型回路」のなかで相互に参照し合うテキストの一つにすぎないのであると。そして、定型回路の支配力はそれだけにとどまらないとする。つまり、対象社会の本質とされていたものも、実は理解の定型回路がつくりだしてきたのであり、他者もまた勝手に表象してきたのであると^{註2)}。

また、大塚和夫は、民族誌にとっての「他者」を、フィールドで出会う人々のみではなく、自文化における読者でもあると捉えている^{註3)}。つまりフィールドワークのプロセスは、フィールドでの濃密で多種多様な体験をこの読者に提示するまでであるというように考えることができる。

このことは、「彼ら」の世界にいても、つねに「こちら」側の世界で書くこと、「こちら」側の言葉や様式で表現すること、そして伝えるべき読み手の存在というものを意識させ続けることにつながってくる（むしろ自身の力量や経験による問題も大きいが）。

さて、伝えるべき、そして自分の「作品」に評価を与えることにもなる対象が存在し、その報告、記述という表現行為が一つの帰結点となるという点では、日文系学生の卒業論文作成も同様の状況にある。そして、何らか探求、理解すべき対象を設定するということが出発点になるという点においても同様である。そこには、素朴な欲求として、いろいろ知り学んでいくなかで関心をもったことについて更に理解を深めたい、整理をしたい、わいてきた疑問について探求したいといった思い、また自己の生活世界とは異なる社会的文化的背景のなかで生活する（生活してきた）ひとびとの様子や経験について知ることを通して、自分の暮らす社会のことについて考えたい、といったことなどがあろう。しかし、趣味としての読書や、何か問題を発見したり何かを見つめ直したりする契機となればといったことが動機を中心ではなく、何らか特定の意図や目的をもって資料を探索するという点においては、また旅先の一つとして行くのではなく、あくまでもフィールドワークとして特定の地を訪れようとする場合には、構えかた、姿勢といったことが違ってくる可能性が存在してこよう。そこでは、事前に探求すべく具体的な問題関心が明確に定まっているかどうかはともかくとして、当然一定の帰結点（論文や報告書の作成その他）を意識しつつ調べ始めるのであり、足を向けるのである。そして、その対象についてのテーマ設定の段階において、その地に赴く前の段階において、すでに自己のもつ関心や目的にしたがって、その対象とする社会やひとびとについて何らかのすがたや特質をしばしばア priori に設定しようとしたり、それを彼らにある一定の印象をもって捉えていたりすることがあるのではないか。それが至極当然のことであるように。

しかし、その過程でわたしはある種のとまどいを覚えることがある。このとまどいが一体どこから生じるのだろうかということが、この当たり前のようなプロセスに今こだわっていることにつながってくる。われわれはこうした調査、探求のプロセスのなかに存在する種々の自明性をも疑ってみる必要があるのではないだろうかということである。これは、先のサイドの議論にも通じるものである。そしてそれはフィールドから帰ってからの作業だけではなく、フィールドでなにを見ようとしているのかということとを、そして「彼ら」に対する関わりかたをも自省することにつながるものであろう。

同様に、卒論作成のための資料を探索するなかで、対象理解への思考を進めるなかで、

airiti

学生たちが対象をどのように捉えようとしているのかということについても、自省を促すべき契機があると考えている。

2. たとえば、「日本（人）」についての言説

学生たちの卒業論文指導において次のようなことをたびたび感じている。それは、関心対象について理解ができ上がり過ぎているのではないかということである。言い換えれば、自分自身で既知のものとしている部分が多く、それが調査、探求の前提ともなっているのである。そういったことは、卒論指導においてだけではなく、授業におけるいろいろなトピックにまつわる意見の発表や討論においても感じる日本理解の傾向の一面でもある。

例を挙げると、たとえば次のような対象や事柄認識である。「日本では終身雇用制が崩壊したので...」、「日本（人）は個人主義ではなく集団主義だから...」、「日本では女性の地位が低く...」、「見合い結婚は減り続けているでしょう」、「日本でも若い夫婦は親との同居を嫌がっていて、別居希望が増え続けているし、それが普通になっている。台湾と同じだ」、また「日本も学歴社会である」、「日本の大学生はあまり勉強しない」などなど。果たして、このような捉えかた、言説は的を射たもの、適切なものなのであろうか。また、次のような問いが発せられることも多い。「日本人はどうしてそんなにお酒が好きなんですか（よくお酒を飲むんですか）」。それがもしも飲酒に対して自己の経験世界で否定的な印象があって、それを基盤にして発せられた疑問であるなら、やはり問題をはらんでいると思われる。

これらについては、単に理解が浅いとか、知らない、誤謬があるといった場合も多いであろう。それらが自己の探求が進んでいくにしたがって修正されることになれば問題はないし、また別の角度から新たな視点から見ようとするにつながつていけば、元の認識も理解への一つの出発点となるのだが、前述したように一定の枠組みにとらわれたまま理解を進めていくことで、見るべきものが見えなくなってしまうということが起こりえる。ここで問題となるのは、知らないということや誤解していることではなく、すでに自分で既知、了解事項としているものには、その知識や理解に検討を加えようとしなかったり、自分の生活、思考経験による一定の理解回路に縛られているの「かもしれない」と考えようとしなかったりする可能性である。思い込みや誤解がありながら、それらに気づかない、気づこうとしない、すでに有している理解には敢えて検討を加えようとしないということ

が、われわれには往々にして起こりがちなのではないだろうか。

一例を挙げる。学生たちの関心も強い経済分野のことについてである。三輪芳朗は、「伝統的日本経済観」というものを形成している基本的構成要素として、表裏一体となっている二つの固定された見方について、誤謬がかなりあるのだという指摘を続けている^{註4)}。一つは、「〈融資集中、企業集団、系列化〉等々の一連のキー・ワードにつながる『日本的な』経済システムが重要な機能を果たしたとする」見かたであり、一つは、「産業政策の名のもとに、強い政府が強力な政策介入あるいは指導・誘導を行い、めざましい成果をあげた」とする見かたである。三輪は、「伝統的日本経済観」が、日本経済を観察し分析する際の思考の基本的枠組みとして長期間にわたって支配的地位をしめ続けてきたことの影響は深刻であり、日本経済に関する言説は誤解に満ちていると言う。産業政策の有効性についても、「政府の産業政策として強大な権力を行使して民間の経済活動に介入したことが日本経済の産業的成功の主たる原動力の一つである」という言説も誤解の一つであり、「介入のための政府権力の強さの程度は定義の問題ではあるが、規制産業を除くと、政府の介入はきわめて稀であった」ことが事実なのであると。非常に新鮮な議論であり興味深い。しかし筆者は経済学については門外漢であるし、三輪の論考を詳しく紹介をしたり、それにまつわることがらを取り上げようということがここでの目的では当然ない。とりわけ本稿での問題関心に関わるのは、日本経済に関する探求において「誤った先入観が適切な問題設定を妨げ、有効な情報収集・分析の障害」となっているという主張である。

このことはどのような考察対象に対しても共通することである。すでに広く一般化している見かたにも、その基盤となっているところから見直しを図る必要がある場合があることを、そしてそういったものがいかに多く、強い影響力をもっているのかということが、三輪の経済分野での分析からも喚起されるのである。そして、その「先入観」を生み出すプロセスこそが問題なのであり、自身がもっている、またもとうとしている認識や判断に疑義をいまくことを意識できるかどうかことが重要であろうと考える。

ここでみた例のごとく、知識や理解の指針としては留保すべき可能性をはらんでいるような、また明らかに情報として古いものであったり一面的であったりするキー・ワードや見かたに類したものは、日本事情紹介本や日本語教材の中にも散見される。もちろん経済関係だけのものではない。それらが学生たちに与えている影響の様子や程度についてここで明確にすることはできないが、注目注意すべきことがらであることは間違いないであろう。

一定の見かたにしたがって理解や整理を進めることには、かなりの「誘引」力がある。しばしば接するキー・ワードや概念、言説などにしたがって理解や論を進めると、まとめやすくわかりやすい対象把握そして記述になることも多いであろう。卒論作成においてもそれは「誘引」力をもっていそうである。しかし、そのことによって、個々の事象、対象がもつ多様性や多重性、複雑な諸相やそれぞれの背景にある異質性などを考察から排除することになってはならない（常にそうしたことをすべてに言及すべきだということもまた現実的なことではないが、まとまったかたちにし伝えることの前に、それらの排除を多とすべきではないだろう）。

杉本良夫が、日本語の教科書や参考書のなかで日本や日本人が均質に描かれがちであることにくわえ、日本語の教員が日本社会や日本文化についての専門家ではなく、その多くが所謂ところの「日本人論」を手がかりに日本や日本人についてのステレオタイプを学生に伝授する役割を果たしがちであるとの指摘をしている^{≒5)}。日本語教育に携わる者もそのバックグラウンドはずいぶんとさまざまであるし、教材の選択や用い方、トピックの扱いかたなども慎重に行ない、その内容についてもいろいろと研究を重ねている者が多くいると言えようが、しかし杉本の指摘は傾聴すべきものであろう。当然、言語教育を通して、あまりに固定されたイメージや画一的な規範が伝えられることがあってはならない。

ちなみに、「日本人論」についてはさまざまな角度から非常に多くの議論がなされてきているが、本稿の最初のところで日本、日本人を括弧入れして表現した。実のところ、日本（人）について言及するとき、この「日本（人）」についてもどう定義するかという問題がある。「日本では」、「日本人は」、「日本（人）の国民性」、「日本的」などというときの「日本（人）」は何を誰を指しているのか、どう捉えてのものなのか。これもまた、個々の事象において自明性を問うべき問題になることも多いと考える。しかしながら、ここではその方面に話を展開する方向性にはないので、所謂「日本（人）」と、あいまいさをかかえたままで、「」入れした表現にしておいた。

さて、先ほどの学生たちの言説にもう一度話を戻すことにする。「終身雇用制が崩壊した」というのは、おそらく接した情報を一面的に捉えている結果の単純な理解不足であろう。そしてそこから論を進めようとしても不合理なものとなってしまうが、しかしここで指摘したいのは、そうした理解の程度の問題ではなく、それが、そうした認識を生じさせてしまうプロセスがあつて起こる可能性とその結果生じてしまうものである。それは、繰り返しになるが、固定した自らの経験世界での理解、思考回路というものに縛られている

可能性であり、その結果十分な理解ができないままになってしまったり、誤った認識をもち続けてしまい、見るべきものが見えないままになってしまったりするであろうということである。たとえば、自己の経験世界を認識の背景として「終身雇用制」を捉え、その結果日本の企業で終身雇用という制度が根づいてきたその生活世界の存在、背景が十分には理解できていない可能性が考えられる。そのあたりに理解が及んでいれば、日本では終身雇用制度を、種々調整しつつも基本的には維持しようとしている企業も多いことに、そしてなぜそれが維持されようとするのかということへの関心が生じたり、制度を大きく変えようとしている企業との方向性の違いに目がいたりするかもしれない。これは日本が特殊であるとか、特別なのだということではないことは言うまでもない。それぞれの地にそれぞれの経験世界、生活世界があり、それを捉えることの難しさがあり、うっかりすると見逃してしまうのだということである。

「個人主義、集団主義」にまつわる言説も同様の問題をはらんでいる可能性がある。個人主義に対して集団主義というときの、その個人—集団という二項対立的図式をもとにした見かた自体が果たして常に有効なものなのだろうか。これもまた、サイドのいうところの西洋的近代知による理解と言えるのではないだろうか。また、「個人」、「集団」というときのその概念基盤自体が共通しているのかということが大いに問題となってくる。その他、先に挙げた学生たちの言説、対象把握も、それぞれ同種の問題をはらんでいるのではないか。

「学歴社会」と漢字で書けば同じでも、台湾と日本では「学歴」の意味するもの、それが重視される場や範囲、要求される程度や内容がかなり違っていよう。「大学生が勉強しない」というときの、「勉強」についての捉えかたや考えかた、また大学と社会の関係性なども、台湾と日本では同じではないかもしれないと考えることで見えてくるものもあろう。

「日本の女性は地位が低い」と言うとき、その種々階層性についてはどう捉えられているのだろうか。また、そういった見かたを出発点にするとき、たとえば家庭における女性のさまざまな裁量権の問題や、女性自身にとってもかなり高い満足度があるかもしれない「実質的な豊かさ」などについて、過剰に軽視したり見過ごしてしまうことになってしまったりかもしれない。「酒」、「酒を飲むこと」に対する観念や印象にも違いがあることに理解が欠けていれば、やはり見逃してしまったり誤解したりすることがある可能性は小さくないだろう。「見合い」といわれるものも、その形式においてバリエーションが増え様相も大きく変わってきた。そしてやはり今でも一定の地位は占めていよう。「結婚後の親との同居」を

種々の理由から積極的に選択している場合（たとえば、家事育児などについて親の協力を得ることで、女性が仕事をしやすくなったり「自由な」時間が増えたりする。またいい場所、広いところに住みたい。金銭的余裕ができる等々）についての視点も必要であろう。それは家屋の建築様式にも大きな変化をもたらしている。別居を自由と考えるときの「自由」と、同居で得られる「自由」の意味するものの差異を吟味する必要がある。

先に挙げた言説や見方それぞれについてあまり深く言及する必要はここではないだろうと考え、ひと通りごく簡単にふれてきた。言及が過ぎるとそれでまたある種の色がついてしまうことにもなろう。ここで主張したいことは、やはり自己の認識や判断を時に留保してみようとする意識の存在の重要性である。

3. たとえば、フィールドワークにおける対話で

さて、資料探索時、質問紙調査の製作、聞き取り調査の場面等においても、上述したようなことが背景となり、知識を獲得し理解を深めるための幅を自ら狭めてしまうことがあろう。注意を怠ると、一定の視点でしか対象を捉えられなかったり、また一定の回路でしか対象に近づけなくなる可能性が付きまとう。このことに関連して、以下筆者のフィールドワーク体験を記述することにする。

フィールドではひとびととの対話に多くの時間を要することになる。文献資料をもとに論文を書き進める場合の文献探索に当たる部分、作業である。どれだけいろいろなものを観察できるかということとともに、ひとびとの話をどれだけ聞くことができるかということが、フィールドワークの成否を左右しもある。

たとえば、まずその最初の場面について考えてみると、ここにおいても自明性を問うべき点がある。特定のテーマや目的をもち、そのためのデータ収集の対象者として「彼ら」を訪ねているという状況であることが、彼らと向き合おうとするときに、すでに彼らをなにがしかラベリングしていたり、またしようとするといった姿勢につながってはいないだろうかということである。対象について、アプリオリに何らかのカテゴリライズすることを当たり前のように行なっているのではないだろうかということである。

たとえば、筆者はエスニシティにまつわる問題に関心をもっているが、何らかの自らが持ち込んでいった事前の知識や理解にしたがって、訪ねる人を、特定のエスニック・グループに帰属感を有している人と捉えていたり、また捉えようとして話を聞くという姿勢にな

ってはいないだろうかということである。また、何らか特定の社会問題や政治運動などに関心があるとしたような場合、話を聞こうとする人を、まずもってどういった立場に立っている人なのだろうか、はたまた一体そのことには賛成している人なのか反対しているのかなどと色分けしたりするといったことである。このことは、対象とする社会やひとびとについて、なにがしかのすがたや特質をアプリアリに設定しようとするものと密接に関係していると考える。

これらのことは、理解や解釈を重ね書き記すという問題にもつながっていく。つまり、相手の属性を確認したり（必ずしも相手に直接確認するということではない）、特定の文脈のなかで、ひとびとの言説やふるまいをわかって（理解しよう）とするということである。例えば、「このひとは××系の人だから……と考えるのだ」といったように。何らか整理をしつつ理解しようとするのである。日常的なふれあいのなかで話を聞くとときに感じる、わくわくしたおもしろさだけでは心もとなくなったりするのだ。

問わず語りに話がはずんでいくとする。いろいろ思ってもいなかったことも聞くことができる。楽しくもあり、また多岐にわたった情報が提示されてもいるのである。しかし、いくら興味深く楽しい話であっても、「事実」の開陳であっても、関係づけて整理をしたり、理解することができないと思われるような事柄が蓄積していくと、フィールドワークとしては不安が募ったりもする。そして、例えば脱線した話が続いているような場合に（非常にひんぱんに起こることであるが）、場をコントロールしようとして、話のそれた方向からそれを元に戻したりするのである。脱線したようなところからまた思いがけない話が出てくるのが非常に多いことも多く経験していながらである。長期にわたる参与観察が行なえるとは限らないし、限られた時間のなかである程度まとまったかたちにしなければいけないという現実問題が意識されるのである（学生の卒業論文作成においても同様の面がある）。

また、次のごとく口をはさみ、手持ちの回路や文脈のなかで一定の理解や解釈を整理しようとしたりすることともなる。「じゃあ、……ということなんですね」などといった具合である。語り手は返す。「まあ、ううん、そういうことだね」。「まあ、ううん」である。しかし、その一定の理解や解釈を手がかりとして、次へ話を進めていこうとする。それでもよく理解ができなかったり、つじつまの合わないことは、置いておくことにもなる。

また対話においては、しばしば（ひんぱんに）問いを発する。この問いを発するという、

理解のための手がかりを得ようとする行為自体にも、「こちら」側に内在している理解の回路の存在が影響している場合が多いのではないだろうか。多くの問いかけはごく自然な対話の要件であるし、関心対象への理解を深めるための至極当然の過程なのだが、そのある種の疑問をいadak自分自身もっている思考回路の存在には意識をもっておく必要がある。疑問、質問というものをまた、自らが既に描いている一定のストーリーやいだいてい期待にそって発している可能性に対する認識も必要であろうということである。

たとえば、見たこと聞いたこと何ごとにも意味の連鎖があるように、それが「彼ら」特有の世界観や対象となる社会構造の表象であるように考えて、「なぜ」「どうして」を連発しがちであるということである。語られた内容にしても、またふるまいについてでも、それらにつねに特段の意味づけや理由があつたり、それらが「彼ら」特有の世界観などの表れであるとは限らないのだ。そして、問いかけそれ自体に、「こちら」側の経験世界によって規定されているところの認識や、フィールドワークの対象についての事前の知識やある種の理解が反映されているという可能性がある。先に述べた、彼らについて彼らの社会についてアプリオリに特質や文脈、問題関心を設定しようとするということにも関連している。小さい可能性ではないであろう。

ここで問題としていることもやはり、「彼ら」の生を自己の経験世界に引き込んで理解しようとする危険性（ときにはある種の権力性となりえるかもしれないもの）が生じてくるということである。

例えばこんなフィールド経験がある。台湾のある原住少数民族のむらでのことである。そこでは毎年夏に一か月間にわたって繰り広げられる祭礼がある。毎日それぞれ行事があり、夜になると連日踊りと酒宴でたいへんな盛り上がりである。わたしも一週間ほどのあいだ毎晩その集落に通い、いろいろ見たり聞いたりし、踊りや酒宴にも参加させてもらったりしていた。数日目のことである。その晩もいつものように踊りの輪はできているのだが、まったくだれも酒を飲んでいない。昨日まではみんな相当な量を飲んでおり、私も多くの乾杯の誘いを受けていたのである。食べるものは用意されている。機会を窺い、どうして今日は酒を飲まないのか、どういう意味があるのか聞いてみた。すると理由はたいへんに簡単なものだった。今日は酒がないのだという。ただ酒がなかったのである。寄進もなく係もほかに調達ができなかったのだとのこと。聞いてみたことで、寄進がなかったからだという理由がわかり、飲食物の準備に関しても新たな注意が喚起させられもしたのだが、酒が用意されていない様子に接して、それを儀礼に関連したものではないかと自分自

身では思い込んでいたのである。これも一定の回路による、経験則からの思い込みである。もちろんこれも聞いてみたからこそ得られた情報であり、問を発することの重要性を確認させもするが、同時にこれもアプリオリに設定した（また、しようとしている）特定の文脈にそって理解を進めようとしていることの表れでもあるのだ。

また、その種族には祖先の霊を迎え感謝を表わしながら、皆でむら中をねり歩くという儀礼があるのだが、ある時その途中で、漢族の廟に入ってしまったのである。儀礼に詳しい人がこんなことは初めてだと言う。一段落した頃また間合いを計りながら、行列を先導していた長老に聞いてみる。この答も簡単なものだった。途中にあったので入ってみただけだと。しかしこれを、漢族の宗教、文化に対する認識や、またそれらとの関係変化の表れ的一端であるとして取るといったように、理解の回路をはたらかせようとしたことを否定できない。そしてさらに、ひょっとしたら実際は長老自身のなかでなにか彼を操る言語化しえない力がはたらいた結果なのかもしれないのだなどと考えてみたりもする。いろいろ解釈したくなったりするのだ。語りが思いやふるまい、経験や世界観を説明しているとも限らないのだ。自らが拠って立とうとする「物語」や「現実」をつくっていることもあるだろう。また、問いかけに対して彼らが無難な答、説明で済まそうとすることもあるだろう。めんどうなことだ感じていることもあるだろう。彼らにはわれわれに答えたり説明をする義務もないのだ。これら語る側のことについては、また十分な考察と留意が必要である。

また逆に、取りたてて何も感じとろうとしなかったふるまいに特別の意味合いがあったりするということもあろう。特定の文脈や回路での理解に囚われているということでは、これもまた同じことだと言える。

ここで問題としていることもやはりまた、われわれが特定の文脈や回路で整理し理解しようとすることへの自省である。言い換えれば、語りやふるまいを、自己世界での知識や経験からもたらされる意味の因果の連鎖のなかで捉え、「なぜ」を連発しそれらを辿り読み取りとっていくことで、彼らの世界観や社会構造を対象化しようとする信念に囚われること、「なぜ」の問いかけを重ね、無理やり意味の連鎖の存在や文脈をみようとすることへの自省である。

無論、外来の者としてこそ、また異質性を有するからこそ見えるもの、感じるもの、そしていただく疑問、それらを否定する必要も、それらが多く存在することに躊躇する必要もなからう。両者は矛盾しない。まったく価値判断を伴うこともない客観性、完全なる中立

性など現実には考えにくい。必要なことは、他者に対する自己の異質性や主観性についての認識であり、そこで確かめることのできる基盤こそが自己の立脚点となるべきものであろう。

4. 「洞察」

上でその一端をみてきたような自省を繰り返しながらも、「彼ら」と対話し、「彼ら」の傍らでさまざま見聞きし体験することで、いくばくかのものを携えてフィールドから戻ってくる。もちろん多くの「わからない」ものをかかえ込んだままである。「確かに私は現地人と同じように考え行動することなど目ざしていない。しかし私は理解した気になりたいのだ。そして事実をいくら集めても、そして実際けっこう熱心に集めてはいるのだけれど、いっこうに理解した気になれそうにないから困っているのだ」^{註6)}。まさに多くのとまどいに満ちたままである。だが、困惑しとまどいながらも、フィールドで獲得できたものを、経験したことを源泉に書くことを始めなければならない。

果たして、それらからなにがしか提示することができるのだろうか。いやその獲得しえたと考えているもの自体が、ひょっとしたら「こちら」側の幻想なのかもしれないのだ。見ようとしている「現実」も、結局は「こちら」側の特定の概念図式や理解の回路にもとづいて見えているのでしかないことを多く含んだ思い込みなのではないか、といったとまどいに満ちたままである。しかし、「事象を知りたいというより事象がどのように生きられるかを理解したいという欲求」、そして「単なる記述ではなく解釈の願い」^{註7)}をもって進めた歩みを源泉として書き始めるのである。

持ち帰ったフィールドノートには、いろいろな情報が詰まっている。卒論作成を目指す学生たちの手元にも集めた種々の資料があろう。

つぎは、これらを整理し、そこからなにがしかを構成していく作業となる。そしてその際にも、理解、解釈ということが問題となってくる。あらゆる事象を文脈化することも、完全に客観性を保った説明的理解や解釈を重ね対象の全体像を浮かび上がらせることも、それは無理なことであろう。

このとき、大切になってくるのが「洞察力」の存在ではなかろうか。フィールドで得たデータや経験をすべて盛り込むことはできないし、整理選択をすることになるが、フィールドへ出たからこそ、自分自身で探索、思考を重ねたからこそ得たはずの感覚（直観や

想像力)が洞察を支えるはずである。それをもとにして、何らかのストーリー構成をなし作品をつくろうとするしかないのだろうと考える。この自分自身が得た感覚を支えにすることに躊躇することはなかろう。卒論作成の過程についても同様のことが言える。こうした感覚をもち得ることがフィールドへ出ることの、資料を求め読み込んでいくことの大きな意義でもあるはずである。そしてそれはまた、記述作業を進めていくことで、フィールドでの濃密で多種多様な体験から、また自らが思考をめぐらせた世界から離れていってしまいそうになるとき、その歯止めになるもの、それらから遊離していくことから引き戻す力ともなりえるものであろう。この洞察する力を得るためにも、「定型回路」の存在を確認し、それを意識し、つねに自己のスタンスを確かめていることが必要になってくると考える。

5. おわりに

文献資料の探索も繰り返し行なうものであるし、フィールドへも、継続してそこにいるような場合を除いて繰り返し出かけていくことが多い。そして、観察や対話、資料の読み込みや思考を重ねるなかで、対象に対する「洞察」力もでき、問題の具体的な設定や修正を行ったり、仮説を立てたりしていく。資料と向き合うということはそういう過程であり、フィールドワークはそうした場であろう。「あらかじめ問題設定するのではなく、何が問題になり、それはどのように生じてきて、そしてどのように表現されるのかということ、それぞれの土地とひとびとに即して発見する、あるいは教えてもらう」^{註8)}ということを経験的な掘りどころとしたい。

また、フィールドワークや思考、記述のプロセスでは、「定型回路」に立っていることを自省しようとしても、いや自省することでより一層わからなくなってしまうもする。けれども、わかった(理解した)気になることよりも、「わからない」ということをかかえ続けていることが大切なのでないだろうか。わかった気に、知っているつもりになっているよりも、認識活動のあいまいさを自覚できることで、その獲得できるものの幅が広がり、「限界を知っていることによって、情報は厳密に」^{註9)}なり、理解も深まることになるのではないか。

そして、異文化について学ぶ学生たちが、とまどいや疑問をいだきながらも、その興味や関心に仕掛けてさまざまな探求を続けていくことは、自らの生活世界を種々の自己経

験を客体化する力を身につけること、他者理解を通して自己を見つめることにもつながっていくであろうし、それは外国語（外国研究）を専攻した一つの大きな意義となるにちがいない。卒論作成の作業はその大きな契機となるものであろう。

註

- 1) Edward Said(1935～)。アメリカの文学批評家。『オリエンタリズム』において欧米の帝国主義、植民地主義が生み出した「オリエンタリズム」を虚構として描き出し、そのアカデミズムの基盤に対して根本的な疑問を投げかけた。
- 2) 引用・参考文献＝サイドおよび松田 1989。
- 3) 引用・参考文献＝大塚。
- 4) 引用・参考文献＝三輪 1990 および 1999。
- 5) 引用・参考文献＝杉本 1993 および 1996。
- 6) 引用・参考文献＝浜本。
- 7) 引用・参考文献＝スペルベル。
- 8) 引用・参考文献＝堀内
- 9) 引用・参考文献＝富永

引用・参考文献

阿部 謹也

1999 『日本社会で生きるということ』 朝日新聞社

太田 至

1989 「フィールドワークについて思うこと—経験・表現・方法」『季刊人類学』20—3

太田 好信

1993 「オリエンタリズム批判と文化人類学」『国立民族学博物館研究報告』18—3

1996 「ポストコロニアル批判を越えるために—翻訳・ポジション・民族誌的知識」岩波講座文化人類学第12巻『思想化される周辺世界』 岩波書店

大塚 和夫

1996 「民族誌にとっての『他者』」『UP』280号

小池 誠

1995 「『異教徒』との出会い—オランダ人宣教師の描くスンバ」合田 涛・大塚和夫

編『民族誌の現在—近代・開発・他者』 弘文堂

サイード, エドワード・W

1986 『オリエンタリズム』(板垣雄三・杉田英明監修/今沢紀子訳) 平凡社

シャルチエ, ロジャ

1994 「今日の歴史学—疑問・挑戦・提案」(藤田朋久訳)『思想』No. 843

杉本良夫

1993 『日本人をやめる方』 筑摩書房

1996 「日本文化という神話」『日本文化の社会学』(井上他編) 岩波書店

杉島敬志

1995 「人類学におけるリアリズムの終焉」『民族誌の現在—近代・開発・他者』(合田
 涛・大塚和夫編) 弘文堂

スperlベル, ダン

1984 『人類学とは何か』(管野盾樹訳) 紀伊國屋書店

高畑由紀夫

1989 「フィールドでの観察についての一試論—霊長類学の立場から」『季刊人類学』20
 一3

富永國子

1994 『人類学的出会いの発見』 世界思想社

谷 富夫編

1996 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』 世界思想社

中川 敏

1996 「オリエンタリズムと数学の直観主義」『社会人類学年報』VOL—22

中野 卓

1981 「個人の社会学的調査研究について」『社会学評論』125

中野 卓・桜井 厚編

1995 『ライフヒストリーの社会学』 弘文堂

名和克郎

1992 「民族論の発展のために—民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』
 57/3

二宮宏之

1994 『歴史学再考―生活世界から権力秩序へ』 日本エディタースクール出版部
濱口恵俊編著

1996 『日本文化は異質か』 NHKブックス

1998 『日本社会とは何か―〈複雑系〉の視点から』 NHKブックス

浜本 満

1989 「フィールドにおいて『わからない』ということ」『季刊人類学』20—3

堀内正樹

1995 「実験民族誌とタバカートーモロッコにおける二種類の記述」『民族誌の現在―近代・開発・他者』（合田 涛・大塚和夫編）弘文堂

マーカス, G・E／フィッシャー, M・M・J

1989 『文化批判としての人類学―人間科学に実験的試み』（永渕康之訳）紀伊國屋書店

松田素二

1989 「フィールドワーク再考―フィールド理解の非定型化のための一試論」『季刊人類学』20—3

1992 「民族再考―近代の人間分節の魔法」『インパクション』75号

1996 「『人類学の危機』と戦術的リアリズムの可能性」『社会人類学年報』VOL—22

1991 「意味と力の弁証法―マラゴリ人の都市死者祈念儀礼をめぐる」『文化を読む―フィールドとテキストのあいだ』（谷 泰編）人文書院

三輪芳朗

1990 『日本の企業と産業組織』 東京大学出版会

1999 「(東) アジアの奇跡? : 伝統的日本経済観の終焉?」 新世紀日本総合研究會
発表稿 (於台北)

モアマン, マイケル

1991 「会話分析とともに―ある民族誌家の自伝」(藤田隆則訳)『文化を読む―フィールドとテキストのあいだ』（谷 泰編）人文書院

森 雅雄

1995 「英国社会人類学と間接統治」『民族誌の現在―近代・開発・他者』（合田 涛・大塚和夫編）弘文堂